

聞き書き ― 降矢静夫 20世紀末の山里暮らし

木俣美樹男編

2014-9-11 現在

本文の構成は不定期に改稿します。決定稿に至らないかもしれませんが、加筆修正日を文頭に入れておきます。聞き書きも確認できない語句（赤字、あるいは？）がありますが、とりあえず、公開します。記録語句が再確認できれば、その時点で修正します。

はじめに

降矢静夫さんに初めてお会いしたのは1975年10月4日でした。彼が65歳のことで、編者の今の年齢と同じ頃でした。この日以来、彼が92歳（2002年）で逝去されるまで、27年間にわたり、山村農人についてたくさんのお話を教えていただきました。彼は最後の山村農人の一人として誇り高く、晴耕雨読の教養人としても、敬愛できる方でしたので、編者は教えを深く受けるにしたがって、山村農人の後継ぎになると決めました。

降矢師との対話を、若気の至りで、本としてまとめたいと言って、磁気テープによる記録を認めていただいたのに、忙しさにかまけて疎かにし、いいわけですが出版の機会にも恵まれませんでした。これを見かねた考古学者の安孫子昭二さんが手紙の整理をかって出てください、降矢師と親交のあったほかの2名宛も含めて、手紙・葉書から、詩歌などを抜き出して、出来上がったのが降矢静夫句集『雪虫』でした。

その後さらに、安孫子昭二さんがご多用の中でも聞き取りのテープ起こしを続けてくださいました。横着な私は先輩にこのような大変な仕事を押し付けてしまい、ほんとうに申し訳なく思っています。出版する機会にはいまだに恵まれませんでしたので、ここに原文をアーカイブズとして、最後の一人である山村農人の暮らしを記録しておきます。なお、句集『雪虫』は残部がありませんので、出版する機会があれば、誤字など修正のうえで再録したいと思っています。

降矢静夫師に心より感謝申し上げます。

2014年9月11日